

## 1.4 世界の成り立ち (地理)

リアスターグは東方・北方・西方・南方・中央という5つの地域が海によってきれいに分けられている。ここでは各地域ごとに地理的な様子を簡単だがまとめている。各地域で知られる国家について概略も記すが、あくまで概略なので詳細は別項(国家・機関)を参照いただきたい。

なお、このページで最初から読めるようになっている部分は、聖帝追悼戦以前・・具体的には終戦暦500年前後の情勢である。聖帝追悼戦では各地域で戦乱が同時多発して大きな変化が起きた地域もある。聖帝追悼戦以後の情勢も確認したい場合は、各記述に散在する「新旅暦」というリンクをクリックすること。ただし、聖帝追悼戦以前では謎となっている部分が明かされているものもあるので、その情報の取り扱いには注意されたい。

これ以降の「新旅暦」をクリックすると、その部分だけが開かれる。別の場所が開かれている場合、その部分は閉じられて、新たにクリックされた部分だけが開く。もし、全てを開いた状態にしたい場合は、以下の「新旅暦の記述を全て開く」というリンクをクリックするとよい。

`{{span class,newh, 現在、新旅暦の記述が全て開いた状態である。}}`

### 終戦暦と新旅暦

元来、リアスターグでは年代を数える一般的な方法として「魔道大戦終結から～年目」という表現が使われてきた。東方のティエル・レン・ティトス帝国が、この表記を公式に採用して、全世界で広まった。もちろん、国家によっては統治する王ごとに変わる年号などを用いる例もあるが、その場合でもこの表現方法は通用する。長く言い習わされているため、単純に「～年」と数字だけをいうのが一般的であり、ルールブック上もそのように記述している。一方、聖帝追悼戦(505～506年)が終結した後、新しい年の数え方を考えようという声が広まり、その結果勇者ティトスが最後に言い残した「これからはみな新たな旅立ちの始まりだ」という言葉を取って「新たな旅立ちから～年目」という表現が考案された。この新たな数え方は「新旅暦」と呼称され、従来の数え方は「終戦暦」と区別して呼ばれるようになった。ルールブック上は新旅暦の場合「新～年」という書き方をしている。聖帝追悼戦後の世界を現す呼び方として「新旅暦になってから」という書き方をしているのも、これが理由である。

## 東方

### 地形と気候

東方地域は東部山岳地帯と、西部平原地帯に大きく分かれる。

東部山岳地帯は少々高地になるせいか、西部平野部に比べて平均的に気温が下がる。それでも帝都を擁する「槍の玉座(やりのぎょくざ)」と呼ばれる山地周辺は、冬の寒さが多少厳しいにしても、夏はかなりの暑さとなる。この山地には「アウザ湖」という大きな湖があり、帝都や「槍の神殿」もその周辺に位置する。そこからさらに東に向かった辺境(=東の果て)は、さらに険しい山岳地域となり、そのほとんどが常に雪で覆われた地域となる。この先を越えたという者は、いまだに現れていない。

「アウザ湖」から西に流れる「ヴェゼリア河」とその無数の支流が、東方地域を縦横無尽に流れて肥沃な平原を形成していった。この西部平原地帯はより温暖な気候で、森林や草原など豊かな緑を育んでいる。また、この河を利用した水運が発達しており、東方の交通の中心ともなっている。



## ・ 槍の神殿

- ・ 暗黒神ダスタム教団の総本山で、帝都が建造される前から " 槍の玉座 " にこの神殿は存在した。現在は " 御神の槍 " が安置されており、帝国との関係も深い。 " 暗黒 " といっても悪ではなく、れっきとした至高三神の一角であることに注意。

::{span class,newh, ダスタム教団壊滅}}

::{span class,newh, " 御神の槍 " が安置されていた " 槍の神殿 " は魔族によって完全に破壊された。教団組織も最高責任者である黒翼戦士長を筆頭に主だったものはほぼ戦死した。シュミファイアの救援があるまで、神殿(だった場所)は魔族によって制圧され続け、 " 御神の槍 " には誰も近づくことすら出来なかった。戦乱が終わって、教団と神殿の再建がすぐに始まったが、実際に再建作業が完了するのに5年の歳月を要した。}}

## 亜人間種族

東方ではエルフとホビットが生活している。

## エルフ

エルフは氏族と呼ばれる血統の単位があり、それぞれの氏族に最長老がいる。この最長老がいる森を 源森 と呼ぶが、エルフの森はそれ以外にも数多く存在する。 東方では " ウェゼリア河 " 流域の森林地帯にエルフの住む地域がある。

- ・ 源森 : " 久緑の森 (くりよくのもり) " (フィオレンサラス氏族)
  - ・ 最長老エルフアリアは魔道大戦終了直後の生まれであり、エルフの中でも最も古い血の氏族である。あまり外部とは関わらないが訪れる者を拒絶することも無い。 " 久緑の森 " 以外にもエルフが住む森は幾つも存在する。名前の通り、フィオレンサラス氏族の森の木々は冬でも青々とした葉をつけ続ける。
  - ・ 帝国から " 公 " の称号を正式に贈られているため、現在でも帝国行政上は " フィオレンサラス公国 " という呼び名が通用する。法的にはエルフやホビット全てが、その自治下に置かれている。皇帝が代替わりしたときは、エルフアリアの使いが帝都を訪問するのが慣わしになっている。

## ホビット

ホビットは通常 数家族程度で寄り集まって丘などに穴を掘って家を作り暮らしている。そして、そうした家が集まっている場所が " 集落 " ということになるが、別々の家単位での交流は無いこともある。 東方では西部の草原地域にホビットの集落が幾つか確認できる。

- ・ " 緑園の里 "
- ・ これは特殊なホビットの集落である。一見すると、普通の集落のように見えるのだが、実はホビットに伝わる隠密の技を訓練するための里なのだ。しかし、そのことはホビットたちの間では絶対の秘密とされており、どんなホビットでもそのことを口外することは無い。このため、そこで学んだ隠密の技は、ホビットが生まれつき持っている能力であるという様に、一般には理解されている。

{{span class,newh, 聖帝追悼戦の戦いにおいて、東方で魔族に襲われたのは帝都周辺部と " 魔術師の塔 " だけであつたため、それ以外の地域は大きな被害は受けておらず、その秩序にも変化は起きていない (もっとも東方のエルフたちは中央地域に移動していたため、もし襲われていた場合、その森は無抵抗のまま蹂躪されただろう)。}}

{{span class,newh, なお " 久緑の森 " の最長老エルフアリア=フィオレンサラス (全エルフの中でも最高齢者である) は、新旅暦になってから体調を大きく崩しており、本人もいよいよ自分に寿命が近づいていることをほのめかしているらしい。}}

## 北方

### 地形と気候

" ジヒト砂漠 " という砂原に覆われた地域。古代魔法文明の中心地がこの地域には存在していたのだが、魔道大戦の折、膨大な魔力を使った影響で、現在のような乾ききった大地になってしまったと伝えられている。実際、この砂漠には数多くの遺跡が存在し、いまだ砂に埋もれて人の目に触れられていないものが多いと考えられている。

気候は典型的な現実世界の砂漠と同じで、日中は非常に暑く、日が沈むと非常に寒くなる。一年を通して季節の変化はほとんど無く、雨が降ることも無い。砂漠における天候の変化とは、すなわち風の強弱の変化であり、死者が出るほどの猛烈な砂嵐が起きることもしばしばである。北方辺境(=北の果て)に行くほど吹き荒れる風の勢いは増してゆき、遂には前が見えないほどの砂嵐となる。その中に入って無事出てこれた者はいない。

砂漠にはオアシスが点在している。また、一般的なオアシスよりも遥かに大きな湖も幾つか確認されており、その周辺に都市が建設される例も多い。はっきりと発見されているのは、"銀の神殿"とエレンヴァースが隣接する"銀の湖"・ヘ＝カハシュが隣接する"カハシュ湖"・ポルワードが隣接する"金の湖"・ヴィシュが隣接する"砂塵の湖"、それにドワーフの地下都市"砂の都ヴァーディ"が隣接する"ドワーフの水がめ"である。

この砂漠の地下には古代魔法文明の遺跡だけでなく、豊富な宝石鉱脈が眠っていることでも知られている。事実、この砂漠には宝石細工を専門とするドワーフの都市があり、そこから技術が伝わったこともあってか、宝石細工が重要な特産品となっている。

なおわずかな南部地域は砂ではなく、乾いた土の平原となっている。そこには背が低いものばかりだが多少は植物も生えている。海から来る湿った空気がこうした土地を形成する原因になっていると考えられている。この地域では雨が降ることはないが湿った霧に一角が覆われることはある。北方に住む人々はこれを"ジヒトの雲"と呼んでいる。

## ヒューマン民族

北方の砂漠に古くから住む民族もまた、その砂漠の名を取って"ジヒト"と呼ばれている。縮れた茶色系の髪、黒い瞳、浅黒い肌が特徴である。

寡黙で実直な性格と思われていたが、北方商人の活躍を見るにつけ、実は話をするのが苦手と言うわけではないことが明らかになっている。信義を重んじて誓いや約束を違えることが我慢できないのだが、そうした気質も最近は失われつつあることを嘆く高齢者が多い。

ジヒト民族の血を最も濃く受け継いでいる人々は、都市に住まず昔ながらの方法で砂漠内で生活している。彼らは特別に"砂弓の民"と呼ばれ、北方では敬意を払われている。「寡黙で実直」「信義を重んじる」という気質も、彼らの間では非常に強く残っている。

## 国家

- ・カハシュ都市連合
  - ・砂漠内に点在する都市が経済・軍事・政治的に同盟を結んだもの。毎年、登録した市民数が数えられ、最も多い都市が"主幹都市"となり、ここに監察局が設置されて連合全体の運営を行う。各都市が出した拠出金を運用する裁量権が主幹都市には与えらえる。
  - ・490年～504年まではポルワードが主幹都市だったが、遺跡の発動で都市が壊滅して市民数が計上できなくなったため、504年途中からレスティアが新たな主幹都市となった。
- ・学術都市エレンヴァース
  - ・"銀の神殿"に隣接するように建造された学術院エレンヴァースで学ぶ者や教える者が生活する場として発展した独立都市。学術院長カレン＝エレンヴァースがそのまま都市の責任者も勤めている。
  - ・カレンはハーフエルフであり、450年の学術院創設以来、一貫して学術院と都市の責任者の任を勤めている。その美貌と活力はまだ衰えることは無さそう

だ。

:::{{span class,newh, 砂塵の暴風 }}  
:::{{span class,newh, 聖帝追悼戦では魔族による攻撃で、連合の都市の半数が壊滅に近い被害を受けた。また "銀の神殿" が最終攻撃目標と思われたが、その手前にあったエレンヴァースも半壊の被害を受け、カレン=エレンヴァースは重傷を負った。錬金術師の尽力と、先年 起動していたボルワード機動要塞により北方の戦いは収束したが、都市連合の構成は大きく変わった。なお機動要塞は、その後 西方~南方と転戦して大いに力となった後、最後の戦いを終えて総員が退避してから自爆し深い海の底へと沈んでいった。}}  
:::{{span class,newh, 戦乱の後、連合に所属する街の構成は微妙に変わったが、砂漠に住むものの暮らしに変わりはない。ただ、魔族との戦いに入々の目を気にせず共に戦ってくれた錬金術師たちに対する人々の考え方が大きく変わり、以前ほど否定的な声は聞かれなくなっている。}}  
:::{{span class,newh, カレンの傷はすぐに治療され、新旅暦に入ってから学院長として彼女は元気な姿を学生たちに見せている。}}

## 独立勢力

- ・銀の神殿
  - ・中庸神タナルス教団の総本山。魔道大戦当時から "銀の湖" のほとりに建てられていたことが知られており、現在の秩序に置かれた北方地域では最も古い建物に近い。タナルスが知識と学問の神でもあることにあやかり、学院エレンヴァースがこの神殿の傍に建てられた。
- ・黄金都市？
  - ・ジヒト砂漠の北方辺境ギリギリのところにあるといわれる幻の都市。ただ、砂漠で迷い込んだ者の中に黄金に輝く都市を発見したと主張する者が多いのも事実である。実際のところは、錬金術師達が隠れ住み、自分たちの知識や技術を高める場所である。高度な錬金術の心得が無ければ、この都市には辿り着けない。

:::{{span class,newh, ゴーレム兵の勇姿 }}  
:::{{span class,newh, カレンが重傷を負ったことで、魔族に蹂躪されるだけとなった学術都市エレンヴァースと "銀の神殿" を救ったのは、なんと錬金術師たちだった。黄金都市に隠れ住み研究を続けていた彼らは、ヴィシュ家当主リエヌの説得で動き、自らの作り出したゴーレム兵に乗って魔族と戦った。ボルワード機動要塞が放ったダウゼント砲で魔族に致命傷を与えるまで、ゴーレム兵の防備は揺るぐことなく、堅牢な盾となって人々を守り抜いた。}}  
:::{{span class,newh, 戦いを終えて、錬金術師たちは無言のまま黄金都市へと帰っていったが、人々の記憶からゴーレム兵の勇姿が消えることは無く、錬金術師に対する偏見に満ちた見方は確かに変わっていった。}}

## 亜人間種族

亜人間種族の多くは森や草原に根ざしているため、あまり北方では見かけない。そんな中、ドワーフだけはこの砂漠でもたくましく暮らしている。

## ドワーフ

優れた職人としての技術を持つ種族で、地下に巨大な都市を築き、そこで技を磨く。リアスターグでは各都市ごとに得意とする分野が異なっている。北方では北部に位置する "ドワーフの水がめ" と呼ばれる湖のほとりに都市の入り口がある。

- ・ "砂の都ヴァーディ"
  - ・ この都に住むドワーフは "砂ドワーフ" と通称されている。砂漠で豊富に産出される宝石を使った細工の技術は、元を辿ればドワーフたちから教わったものとされている。ヴァーディは数多くの宝石鉱脈と直結しているといわれる。
  - ・ 宝石細工を求めて訪れた者とは取引をするドワーフもいるし、誰彼構わず取引はしないドワーフもいる。これは大きく分けて "ジグ" ・ "メア" ・ "バド" という3つの流派があり、流派ごとにそのスタンスが異なるのが原因。

{{span class,newh, ヴァーディも砂嵐の姿をとった魔族の通り道にあって、地下都市であったため事なきを得た。実はクアロシウスの鉱脈と、ヴァーディの鉱脈とでつながっている部分があり、そこを通じてクアロシウスの人はヴァーディに避難することで、命を守られていたことがあとで分かった。}}  
{{span class,newh, 新旅暦になってからも、宝石細工の街としての名声に変わりはない。}}

## 西方

## 地形と気候

西方はそのほとんどが沼地となっている。また、空は常に雲に覆われていて薄暗い。それでも雲の隙間から時折溢れる太陽の光が、この地域の植物に僅かな活力を与える。どちらかという劣悪な環境であるがゆえか、この地域に生息する植物の生命力は驚くほど高い。

特にこの地域にはエルフの森が存在するが、その森の木々は葉が美しい銀色で、薄暗い西方地域において光すら放つといわれる。ピクシーの里も、そうしたエルフの森の中にある。

この地域は魔道大戦において、魔界への"扉"が開かれた地域だった。現在の薄暗い天候や沼地ばかりの地形はその影響といわれている。現在"扉"は完全に閉ざされて入るものの、西方辺境(=西の果て)はいまだに魔族の瘴気が立ち込めており、リアスターグに住む生物が長時間生きられる環境ではなくなっている。辺境地域は"歪んだ沼地(ひずんだぬまち)"と呼ばれ、まともな感性を持つ者なら近寄ることすら拒む。

ただ、不幸にもそこに迷い込んでしまった者が、滅びたはずのフリーアムス民族の姿をした者に助けられて、無事に出てこれた・・・という話が後を絶たず、何か秘密があるであろうことだけは知られている。

ほとんどが沼地のこの地域だが、それでも田畑として何とか使える平原が無いわけではない。西方は不幸にも2つの国が争ってきた地域だが、そうした平原が戦いの際に駆け引きに使われてきたことは想像に難くないだろう。

特に"ゲーゼ布"と呼ばれるこの地域独特の染物は、西方の限られた地域でしか生息しないゲーゼという植物を利用しており、リアスターグ全土でその美しさから珍重される。

{{span class,newh, 聖帝追悼戦の西方における戦いは、魔族による圧倒的な侵略拡大から始まった。"歪んだ沼地"にはまるで"扉"が開かれたかのような勢いで無数の魔族が溢れ出し、西方は次々にその勢力に飲み込まれていった。"銀輪の森"を含むエルフの森の殆どは焼失し、西方地域の半分以上が魔族に埋め尽くされるほどになった。}}

{{span class,newh, 最終的に北方から転移したポルワード機動要塞と、ジェスリダ、それにゼール王国と正統ゼール王国の全軍が総力を挙げて戦い、かろうじて魔族を退けたが、両国の王城深くまで魔族の侵入を許すという激しいものだった。この戦いではゼール王国側が密かに集めていたというフリーアムスの遺産が惜しげなく使われており、その力を魔族も恐れている節が見られる。}}

## ヒューマン民族

西方には過去に"フリーアムス"と呼ばれる独自の民族が生活していた。彼らは高度な技術で魔法を封じ込めた武器や道具を作ることに長けていた。魔道大戦の折、その技術を脅威に感じた魔族は、真っ先にフリーアムスを根絶やしにした。このため、現在純血のフリーアムスはどこにも存在しない。外見的には、直毛の銀髪・銀の瞳・白い肌が特徴とされる。

・・・根絶やしにはされて純粋な民族としては消滅したとはいえ、その血自体は失われていない。西方では時折フリーアムスの特徴を持った子供が生まれる。それは西方において吉凶様々な前触れとされている。

西方に住む人々はその鬱屈とした気候ゆえか、物静かな性格であることが多い。また、困難や苦痛を黙って忍耐する傾向がある。「明けない夜は無い」というのが彼らの持論だが、西方の空はなかなか明けないのが現実でもあるのだ・・・。

## 国家

- ・ゼール王国
  - ・西方で争う2国の1つで西方北部地域を統治する。元々は正統ゼール王国と1つ

だったが、重臣達の意見の相違から2つの国に分裂した。その後、何度かの戦いを経て、現在はお互いに戦の矛を収め、協調しようとしている。

- ・491年のアフィシャス事変で魔族に殺されたゼール2世に代わり、492年アナティ1世が即位し、500年以降もその統治が続いている。
- ・正統ゼール王国
  - ・意見の相違からゼール王国を出奔した元王妃エーリアが興した王国で、西方南部地域を統治する。代々、女王が最高権力者として立つ。最も新しい女王は初代の女王(分裂前の王国の王妃)と瓜二つの外見で話題となった。
  - ・491年のアフィシャス事変でジュゼ2世が魔族に殺されて以来、3年間王位継承者がいなかったが、494年にエーリア2世が即位して、500年以降もその統治が続いている。彼女は、王国の初代女王エーリア1世と瓜二つの外見で知られる。

:::{{span class,newh, 西方守護盾王国 (せいほう しゅごじゅん おうこく)}}}

:::{{span class,newh, 聖帝追悼戦後、二つの王国は遂に一つに戻った。正式な名前は "西方守護盾王国" だが、人々には "新ゼール王国" と通称されている。王都には大陸中央部に位置するアフィシャスが選ばれ、シリアム=ゼールと改名された。国王はアナティ1世が就任したが、エーリア2世は西方での戦いの後「役目を終えた」として退位し、その後の行方は分かっていない(新王国も彼女を敢えて捜索はしていない)。西方は新王国の元、安定した地域へと変貌を遂げている。}}

## 独立勢力

### ・精霊守ジェスリダ

- ・大地(だいち)の精霊と盟約を結んだ精霊剣士の一族。西方2国の争いに一度だけ加担したが、その時の破壊から、西方では恐怖の対象とされている。その戦いも望んで起こしたものではなかったのだが、結果を受け止めて彼らはその境遇を受け入れている。

:::{{span class,newh, 守る者の炎}}

:::{{span class,newh, ジェスリダは開戦当初、エルフたちと共に中央で魔族と戦っていた。彼らの力は魔族の炎を防ぐ大きな働きとなり、彼らがいなければ事態はもっと深刻な方向に向かっていただろうといわれる。中央の戦いが収束したあと、彼らは説得されて西方へと戻り、まさに魔族に打ち倒されそうになっていた二王国を救う盾にもなった。}}}

:::{{span class,newh, この戦いの後、西方の人々のジェスリダに対する恐怖の念は大きく緩和され、彼らは静かな生活を続けられるようになったと共に、西方でも以前ほど身を隠さずに行動できるようになった。}}

## 亜人間種族

植物が生育するのは難しいはずの沼地だが、ここにはエルフとピクシーが生活している。

## エルフ

エルフは氏族と呼ばれる血統の単位があり、それぞれの氏族に最長老がいる。この最長老がいる森を源森と呼ぶが、エルフの森はそれ以外にも数多く存在する。西方では辺境にかなり近い西部にエルフの住む地域がある。

### ・源森："銀輪の森(ぎんりんのもり)"(メヌエラ氏族)

- ・最長老のリュシル=メヌエラは純血のフリーアムスを父親としており、その技術を継承している・・・という噂は今でもまことしやかに人々の間で語られる(外見的にもその可能性が高いことに間違いは無い)。
- ・この地域で森を形成できるのはどうやらフリーアムスの失われた技術によるらしい。というのも、西方でエルフの住む森は木々の葉が銀色に光るためすぐに分かるし、この"銀"というキーワードは西方においてはフリーアムスの象徴でもあるからだ。かつて、正統ゼール王国の女王ジュゼ1世が、自らの病をおして流行り病の特効薬を求めて訪れた時も、その知識を教えられて人々の命が救われた。

## ピクシー

ピクシーは小さな体を活かして隠里を作って生活している。その里には必ず女王がいて、親代わりとも言ふべき役割を果たしている。西方では"銀輪の森"の中に里がある(エルフと違い周囲に他の里は無い)

・ "大女王の里"

- ・ 現在、ピクシーの女王は3人いることが知られているが、"大女王(だいじょおう)"という呼び名は単純に他の女王と区別するための呼び名で優劣を表すものではない。
- ・ 大女王はピクシーの平均的な寿命を遥かに超えて存命だが、これは女王という特殊な立場だからといわれている。

{{span class,newh, 西方におけるエルフの森(およびその中にあったピクシーの里)は、聖帝追悼戦においてほぼ全てが焼失した。西方のエルフとピクシーは中央地域に集まっていたため、全く抵抗もできなかった。西方エルフ最長老のリュシル=メヌエラは、最後まで"銀輪の森"に留まり、あやうく魔族に殺されるどころだったのを、辛くも救出されている。この時、魔族と その手先であるはずの妖術師とかが対立し、妖術師によってリュシルは救出されたという噂があるが、リュシル本人が何も語るうとしないので、真相は不明のままである。}}

{{span class,newh, 新旅暦に入ってから、リュシルの指揮の下、エルフとピクシーは森の復興作業を開始している。すくすくと苗木は育っており、銀色に輝く森がいずれは現れることだろう。}}

## 南方

### 地形と気候

非常に蒸し暑い地域。現実世界で言うなら"亜熱帯"~"熱帯"に相当する気候で、山岳地域に囲まれるようにジャングルが広がっている。雨季と乾季の差がはっきりしており、それこそ雨季になると外を出歩くのさえ困難なぐらいのスコールが降り注ぐ。雨季は一年の4分の1程度(2ヶ月)で、その前後は比較的過ごしやすくなる。

南方地域では、このジャングルのことを"ソラジア"と呼んでいる。この地域の北西部を除いたほとんどの地域が"ソラジア"となっている。そして、その周囲を囲む山岳地域は"ソラジアの器"と呼ばれている。南方辺境地域の山岳地域もこれに含まれる。

この"ソラジア"の中にはエルフが住む森もあり、そこにはピクシーの里もあることが知られている。また、ドワーフの地下都市が2つ建造されていて、どちらも有名である。

"ソラジアの器"南東部からは南方で最大規模の河"バリドース河"が北に向けて流れている。この河は途中で大きく2又に分岐する。分岐した以降は"東バリドース河"と"西バリドース河"と呼ばれ慣わされている。"ソラジア"はこのバリドース河流域に広がっているともいえる。

この河は地下にも流れ込んでおり、その一筋を辿ることで地上に出ることなくドワーフの2つの都市("鉄の都メナフィ"と"岩の都ケレイア")を行き来できるというのが、当のドワーフたちは、そうしたことを口にするには無い。ただ、そうした地下水路があるとしたら、"バリドース河"からかなり離れた南西地域にも"ソラジア"が広がっている理由の説明がつかののではないかと主張する学者は多い。

"バリドース河"より北の地域(北西部地域)は"ソラジア"の霧囲気が薄れて、なだらかな草原地帯になっている。地形的には北に向かって突き出た半島が2つある格好で、西側の方を"バリドースの西角(にしづの)"、東側の方を"バリドースの東角(ひがしづの)"と呼んでいる。

"バリドースの西角"の先端部分にラノス教団の総本山"神聖都市グリアテール"が建造されており、"バリドースの東角"の方は紆余曲折の末、全域がビステム王国領となっている。こうした事情から、この2つの半島は"グリアテール"・"ビステム"という呼び方でも、人々には通じる。

"ソラジアの器"を南に超えていった先(=南の果て)は"時が凍る地"と呼ばれる不可思議な地域となる。そこには"ソラジア"とは異なる平原地帯が広がっている。しかし、一定のラインを超えてその地に侵入した者は、そこでそのまま動かなくなる(飛んでいるなら宙に浮いたままになる)。

いつからそのような地域になったのは不明だが、この地域は時の流れが完全に止まっており、入ったが最後永久にそこで凍りつくしかないのである。可能な範囲で調べてみると、かなり古い様式の建物も見られるということだが、近寄ろうとしても帰ってこれないので、それ以上調べることはできていない。

"ソラジアの器"の南方辺境部には"ネハースリッグ"というウィングの都市があり、"ソラジアの器"を越えて"時が凍る地"へ向かおうとする者がいないか常に監視している。

## ヒューマン民族

南方には"アウギューヴ"と呼ばれる民族が昔から生活している。縮れた金髪・金の瞳・黒い肌と言う特徴を持っている。特に有名なのが、この金の瞳でアウギューヴ民族と混血した場合、それが異種族であっても瞳の色は高確率で子供に受け継がれる(実際、南方に住む人々は種族・民族に関わらず、瞳の色は全て金である)。だから"金の瞳"という呼び名は南方出身者を指す言葉として一般的に使われる。

南方に住む人々は明るくて社交的な性格であることが多い。東方では高貴な印象を与えているエルフたちですら南方では明るく人付き合いが好きな性格だったりする。また喜怒哀楽がハッキリしており、そうした感情をあまり隠せない。

南方にはアウギューヴほど数はいないが、全く異なる文化を持つ少数民族も暮らしている。特に良く知られているのは、アンフェナを占領して竜王朝を開いた"ファランズ"であるが、都市を占領してまで生活の場を確保しようとする民族は少なく、山はジャングルの中にひっそりと集落を作って暮らしているといわれる。

{{span class,newh, 南方地域は聖帝追悼戦の戦いの中心となったところであり、その影響を最も大きく受けた。地形的な変化などは無いが、国家情勢は劇的に変化している。以下では、新旅暦になってから最終的に落ち着いた秩序について記述するに留めるので、詳しい経緯については国家・機関の記述を参照されたい。}}

## 国家

- ・ビステム王国
  - ・現在の南方で最大の勢力。リド王の支配下で急速に領土を拡大し、従わない国家は容赦なく責め滅ぼし、生き残った人々には圧制を強いている。しかし、勧告に従って心中した国家には比較的緩やかな統治をするため、進んで臣従する国家も多くなった。
  - ・元々"バリドースの東角"の都市国家に過ぎなかったビステム王国だが、現在は"バリドースの東角"のほぼ全域と、河を渡ってその周辺部に勢力範囲を拡大している。その拡大の目的は不明で、周辺国家は警戒を強めている。
  - ・481年以來、リド王が統治を続けている。その姿は即位以來年老いることを知らないという。
- ・中立都市レハ
  - ・"バリドースの東角"中央部にある都市。ビステム王国の現国王リドの出身地だが、中立を宣言し、なぜかビステム王国もこれを認めている。
- ・ディス公国
  - ・ビステム王国に滅ぼされたディス公国の公女が逃げ延びた後、改めて滅ぼされた祖国を再興したもの。ビステム王国に対抗する勢力の旗頭ともなっているが、国としての力は残念ながらまだまだ及ばない。
  - ・ビステム王国に滅ぼされたディス公には双子の姫が生まれていたが追っ手を逃れて成長したマリエルが女公として名乗りを上げた(もう一人、双子の姉アリエルは行方不明のまま)。
- ・オッフレング王国
  - ・ディス公国と共にビステム王国に対抗している。元は古い国家だったが、その王家が絶えた後、新たな国王を迎えて勢力を拡大している。国王はディス女公と恋仲にあることで知られ、その結束力に疑いは無い。

- ・ "虹の傭兵団" と呼ばれる組織があり、れっきとした国の正規軍・すなわち騎士団なのだが、周囲の要請を受ければ魔族等との戦いのため国外にも赴くことで知られる。
- ・ 代々、フィリップと名乗る魔族と戦ってきた王国だが、500年にとうとう王族が全てフィリップに倒され断絶した。その後、王家に伝わる神剣ワレムに選ばれた若者ケリングが国王として即位して話題になった。ディス女公マリエルとは冒険者としてともに旅をしたことがあり、恋仲であることが知られている。
- ・ 山岳都市ランデルト
  - ・ 元々はならず者が集う山岳の都市だったが、最近据えられたリーダーの号令下、ディス公国やオフレング王国と共にビステム王国と対抗する勢力として名乗りを上げた。そのリーダーはギルスといい、オフレング国王ケリングやディス女公マリエルとともに冒険者として活動していた。そのため彼らと協力してビステム王国と対抗しているといわれ、そのことをギルスも否定はしていない。
- ・ 竜王朝
  - ・ 南方の少数民族ファランズ族が東部の独立都市アンフェナを突如侵略し、建国を宣言した国家。アンフェナ住民に対する統治は穏やかなため、住民達は現在の状況を受け入れているらしい。それ以上に領土を拡張する動きは見られていない。
  - ・ ファランズ族は竜を神として信仰しており、その御告げに巫女が受け取って行動しているとされる。この御告げは約30年ごとに下り、前回の御告げでアンフェナを侵攻した。次の御告げが下る時期が近づいており、その不気味さゆえに周囲は警戒している。
- ・ ジデニア王国
  - ・ 南方東端、"ソラジアの器"より東に開けた平野部があり、そこに建国された国。この地域でしか収穫できない香辛料の取引を国で管理しており、それによって国費がまかなわれている。その王家は北方商人とも関連が深いといわれており、実際北方商人に対して便宜が図られているといわれる。
  - ・ 香辛料取引の手腕は、第三王女リエーヌの商才によるもの。その才幹を見込まれて、490年に北方の大商人でもあるヴィシュ家が彼女を養子として迎え、ついには当主の座を譲ったことで話題になった。
  - ・ 香辛料取引の独占を守るため、かなり厳しい鎖国体制を敷いている。港町でもある王都シリウム＝ジデニアスの港とその周辺のごく僅かな区域以外に他国の者は入ることが許されず、自国民が外に出る時も厳しい検査が行われる（香辛料の持ち出しが無ければ自国民の出入りはそれなりに可能）。

::{{span class,newh, オフレング連邦 }}  
 ::{{span class,newh, 聖帝追悼戦の戦いは南方で始まり南方で終結した。最終的な決戦の地となったビステム王国の王都は廃墟と化した。それ以外のビステム王国領下の都市と、中立都市レハはケリングに帰順して、オフレング王国領となった。}}  
 ::{{span class,newh, ディス公マリエルとケリングは無事に婚姻の儀を済ませ、ディス公国もオフレング王国領となった。この時"公"の称号もオフレング国王ケリングに委譲されている(法的拘束力は無く、ティトス12世がよこしたジョークではあるが)。}}  
 ::{{span class,newh, さらに竜王朝を興していたファランズ族が突然マリエルに帰順し、マリエルの夫であるケリングにも忠誠を誓った。ファランズ族はアンフェナの統治権もオフレング王国に委譲して、単なるその都市の住人となった。そしてケリングやマリエル亡き後もオフレング王国への忠誠を守り通していく。}}  
 ::{{span class,newh, その後10年ほどたってから、オフレング王国は オフレング連邦と名を改め、北方のカハシュ都市連合と同じような都市連合国家になる。初代の代表者("主席"と呼ばれる)には、ケリング亡き後を引き継いだマリエルが就任したが、世襲することには一切こだわっていない。各都市は都市内での自治を行うようになり、聖帝追悼戦以前のオフレング王国領とディス公国領に関しては、引き続きオフレング王家が統治を行っている。}}

::{{span class,newh, ランデルトとネハースリッグ }}  
 ::{{span class,newh, 山岳都市ランデルトの頭領ギルスは、聖帝追悼戦の後、ネハースリッグの有力者の娘ラナとの結婚を発表した。ラナは結婚する前からギルスと共に行動して、聖帝追悼戦を戦ってきたため、このことに驚く者はいなかったという。その他、ランデルトに関しては亜人間種族の項も参照されたい。}}

::{{span class,newh, リエーヌのその後 }}  
 ::{{span class,newh, ジデニア王国の鎖国体制や、香辛料の取引については、新旅暦になってからも代わりは無い。ただ、北方のヴィシュ家が聖帝追悼戦で没落した後、最後の当主となったりエーヌが、生まれ故郷であるこの地に戻ってきているという噂はある。だが、真偽ははっきりしていない。}}

## 独立勢力

- ・ 神聖都市グリアテール
  - ・ 光明神ラノス教団の総本山。巨大な神殿だが、城壁に囲まれた都市となっており、教団関係者だけでなく、そこに生活する者を相手に商売する店も数多く存在する。生活に困った者への援助を常に行っているため、城門にはそれを求める

人々の列が常に出来ている。

- ・魔道大戦の折は、神官たちの魂を掛けた結果により、魔族の侵入を遂に許さなかった。リアスターグ世界で戦う神々や人々にとっては最後の砦とも言える存在だった。
- ・精霊闘士バリダ
  - ・大空(たいくう)の精霊と盟約を結んだ精霊剣士の一族。"バリドース河"の源流付近に里があり、その河の名前とも関連があるといわれる。その力を人々のために使うことを旨としており、積極的に南方で傭兵として力を振るう。西方のジェスリダとはある意味正反対の評価を人々から受けているともいえる。
- ・精霊船団カンリダ
  - ・大海(たいかい)の精霊と盟約を結んだ精霊剣士の一族。巨大な船団を形成して、海の上で生活している。"西バリドース河"は、最終的に大きな湾に流れ込む。この湾は"カンリダ湾"と名づけられており、まさにこの湾こそが彼らの生活圏である。

{{span class,newh, 聖帝追悼戦の序盤においては、グリアテールから派遣された聖戦士はオッフレング・デイス連合軍と共に、バリダの一族はランデルトと共に、カンリダの一族は帝国の船団と共に、ビステム王国軍と戦い、序盤のビステム王国包囲網を形成した(これだけの相手と戦って戦線が瓦解しなかったのだから、ビステム王国軍の実力は相当なものであった)。}}

{{span class,newh, リド王がティトスを名乗って全世界に宣戦を布告し、ビステム王国の王都に魔族の"門"が開かれて、魔族の"城"が形成されてからも、南方における魔族との戦いの主軸となり、世界各地から戦力が集結して最終決戦を挑むまでよく持ちこたえた。}}

{{span class,newh, 戦いが終わった後の彼らの生活は、戦いの前と何も変わっていない。}}

## 亜人間種族

南方では全ての亜人間種族を見かける機会がある。

## エルフ

エルフは氏族と呼ばれる血統の単位があり、それぞれの氏族に最長老がいる。この最長老がいる森を源森と呼ぶが、エルフの森はそれ以外にも数多く存在する。南方では"ソラジア"南西部にエルフの住む地域がある。

- ・源森："命光の森(めいこうのもり)"(キュールセルタ氏族)
  - ・最長老はオーサレイス・キュールセルタ。この森の中に湧く泉の水には病を癒す魔法の力がある。森から持ち出すとその力は失われるため、この水を求めて多くの人々が森を訪れる。そうした人々をエルフは快く迎え入れてくれる。

## ピクシー

ピクシーは小さな体を活かして隠里を作って生活している。その里には必ず女王がいて、親代わりとも言えるべき役割を果たしている。南方では"命光の森"の中に里がある(エルフと違い周囲に他の里は無い)

- ・"友女王の里"
  - ・"友女王(ともじょおう)"はガーランド戦役後、初めて互いを確認した大女王と小女王が、その友誼の証として生み出した女王で、すなわち3人の女王の中では一番年若い。

## ドワーフ

優れた職人としての技術を持つ種族で、地下に巨大な都市を築き、そこで技を磨く。リアスターグでは各都市ごとに得意とする分野が異なっている。南方では"ソラジア"の南北にドワーフの都市が2つある。また山岳都市ランデルトは、もともと鉱脈が尽きたために放棄された鉄ドワーフの都市であったことが知られている。

- ・"鉄の都メナフィ"
  - ・"ソラジア"北部にある。ここに住むドワーフは"鉄ドワーフ"と呼ばれ、鍛冶を中心とする武具製作に長けている。ミスリルと呼ばれる軽くて丈夫な金属の加工技術は彼らにしか扱えない。

- ・腕を認めた者にしか武具を作らない代わりに、その者の実力を最大限引き出す武具を作ってくれるため、彼らの武具を求める者は絶えない。
- ・ " 岩の都ケレイア "
  - ・ " ソラジア " 南部にある。ここに住むドワーフは " 岩ドワーフ " と呼ばれ、土木建築技術に優れている。ガラスを作る技術は彼らでなければ扱えない。
  - ・ リアスターグにおいて、最も開放的なドワーフで請われればどこにでも赴きその腕を振るう。各地の城や城壁の殆どは彼らが手がけているといっても過言では無い。

## ホビット

ホビットは通常 数家族程度で寄り集まって丘などに穴を掘って家を作り暮らしている。そして、そうした家が集まっている場所が " 集落 " ということになるが、別々の家単位での交流は無いこともある。南方では、北西部 " バリドースの西角 " に広がる草原地帯にはホビットたちが住む集落が確認されている。かつては " バリドースの東角 " にも里があったようだが、ビステム王国の統治下に置かれるにつれて、西角の方にホビットたちは避難することを選んだようだ。

- ・ 特に有名だったり特殊だったりする里は無い。

## ウィング

ヒューマン世界で生きているウィングも多いが、リアスターグでは自由に飛行できる彼らならではの空中都市も存在している。一応、空を飛べない者でも不自由しないように配慮されているが、そこまで行くのが大変という話もある。南方では " ソラジアの器 " 南方辺境地域にウィングの住む空中都市がある。

- ・ ネハースリッグ
  - ・ この都市は、緊急時を除けば中に部外者を入れることは滅多に無い。唯一 近隣のランデルトとだけは取引をしているが、後は " 時が凍る地 " へ向かおうとする者がいないか哨戒する日々をすごしている。ネハースリッグ出身のウィングをこの都市周辺以外で見かけることは無い。が、何らかの目的で翼を隠してリアスターグ各地を旅する者がいるという噂は絶えない。

## ライカンスローブ

人と獣の2つの姿を持つ種族だが、その存在は公には知られていない。当然、以下の情報も一般には知られていないことにプレイヤーは充分留意すること。

- ・ 山岳都市ランデルト
  - ・ ネハースリッグのウィングたちと親交があるといわれるランデルトは公に明らかにはされていないが、実はライカンスローブが集まり避難する都市でもある。つまり、その住人の殆どは獣の姿をとるし、そうでない者はその秘密を生涯守り抜くことを誓わなければならない。

{{span class,newh, 亜人間種族たちも聖帝追悼戦には大きく関わってきた。ただ、種族ごとに関わり方には大きな違いがある。}}

{{span class,newh, ネハースリッグのウィングたちは " 時の凍る地 " で起きた異変に対応していたといわれる。何が起きていたのかは聖帝追悼戦の戦いの陰に隠れて詳細は不明だが、 " 時の凍る地 " から何か強大な魔族が現れていた可能性が高い。ウィングたちにどれほどの被害があったのかもよく分かっていないが、その後 常に山岳地域を哨戒していたウィングの姿が一時期見られなくなったという事実だけは残っている。}}

{{span class,newh, ネハースリッグ出身のラナが、ランデルトの頭領ギルスに嫁いだため、事情を知らない者が驚くと共に、ネハースリッグ出身のウィングという存在が広く知られるようになった。だが、新旅暦になってからも、外部の者を基本的に受け入れない姿勢に変わりはないし、山岳地域の哨戒もほどなくして再開されている。}}

{{span class,newh, エルフたちは他地域のエルフと同様、中央地域に集い " 深淵の森 " を守る戦いに参加していた。 " 命光の森 " を始めとするエルフの森も魔族に襲われたが、ピクシーたちが残っていたこともあり、大きな被害は出ていない。疾病を癒す泉の力が森を守るための大きな助けになったことは言うまでもないし、深慮暦になってからもその力に衰えは見られない。}}

{{span class,newh, ドワーフとホビットはオッフレング・ディス連合軍に加わって魔族と戦っていた。}}

{{span class,newh, 戦いの終盤、既に使用は殆ど困難と思われたボルワード機動要塞のダウゼント砲を修復し、とうにか一度は発射できたのもドワーフたちが尽力したからだった ( これが無ければ最終決戦の突破口は作れな

かった)。}}  
{{span class,newh, ホビットはいずれの戦いでも優れた諜報と伝令役を務めていた。}}

{{span class,newh, ピクシーたちはネハースリッグからの要請を受けて、彼らと共に戦うため南方に留まっていた。またエルフがいない間、エルフの森を侵入者から守るという役割も自認していたようである。彼女らの力もあってウィングやエルフたちは安心して戦えたことだろう。}}

{{span class,newh, ランデルトに住んでいたライカンスローブたちはギルスに従って、ビステム王国勢との戦いに参加した。"白き月"が満ちていると人の姿を取れなくなる彼らだが、リド王がディス公マリエルとの婚約を発表してから、聖帝追悼戦と呼ばれる戦いが終わるまでの間、"黒き月"が常に"白き月"の大半を隠した状態になったため、彼らは自在に姿を変えて戦うことが出来た("黒き月"は本来なら"白き月"を覆い隠そうとしていたのかもしれないが、慈母神がそれだけは許さなかったのだといわれている)。}}  
{{span class,newh, こうして獣人であるという最大の秘密を隠したまま、聖帝追悼戦では、その実力をいかに発揮して、ランデルトの名はよく知られるようになった。このため、山岳都市を訪れる者が増えてしまい、秘密を守るために、外部から来た人を迎えるための区画が、ランデルトには設けられるようになった。}}

## 中央

### 地形と気候

魔道大戦末期、魔王ミレニルスが封印され、その影響で結界に閉ざされてしまった地域。その封印が解けて全土を巻き込んだガーランド戦役が起きるまでの おおよそ 300 年間、ここでは独自の文化が発達していくこととなった。

"剣"と"盾"の名で呼ばれる大きな島と、さらに幾つかの小さな島々で成るこの地域は、比較的温暖な気候(東方西部に近い)だが、風がちょっと強いことで知られる。そよ風程度のことはあるが、それでも無風状態になることはほとんど無い(結界に閉ざされていた頃は、逆に風がほとんど吹かなかったといわれている)。

"盾"の中央部分は"ガーランド宮(きゅう)"と呼ばれる高い山で、その周囲は森林に覆われているが、それ以外の地域は平坦な草原となっている。草原地帯では農業も営まれ、人々の生活を十分に支えることが可能となっている。そうでなければ、ガーランド戦役が始まる前に、人々は死に絶えていたであろう。

ちなみに山の名前に何故「宮」という字が使われているのかについて、はっきりしたことは分かっていない。古代魔法文明時代、ここには巨大な宮殿が存在したが、魔道大戦により崩壊して山になった・・といった荒唐無稽な説もある。いずれにしても遥か昔から、この山は"ガーランド宮"と呼ばれており、中央を統治する「ガーランド選王国」という国名も、この山の名から取られた。

"ガーランド宮"とその周辺は、結界に閉ざされていた間の中央地域においては、亜人間種族が隠れ住む場所だった。・・というのも、結界に閉ざされていた時期、ヒューマンの間で亜人間種族に対する強い差別意識が高まり、共存することが困難になっていたからだ。現在、そうした確執は解消されているが、人がなかなか入りづらい山岳地帯に逃げ込むしかないほどの苦境に立たされていたという事実は、今も残っている。

現在もこの山の周辺にウィングの都市"リッグキート"や、エルフの森・ホビットやピクシーの里が存在する。

### ヒューマン民族

中央独自の民族は"ガレイア"と呼ばれる。直毛の黒髪・黒の瞳・肌は黄の民族で、結界に閉ざされていた時期に、その他の地域とは全く異なる文化を形成していた。保守的かつ排他的な傾向が古くからあり、ガーランド戦役以前はそれが長じて亜人間種族を迫害し始めるほどだった。

戦役後は異なる文化(しかもそちらの方が多数派)に触れる機会を得て、もう少し他者を認められるようになってきている。それでも、古い伝統を重んじる気質が最も強い民族である。また名誉を重んじる独特の文化もあり、リアスターグでも特異に見られることがある(それでも北方ジ

ヒト民族とは通じるものがあるらしい)。

中央地域の人名は「姓 - 名」の順番で、他の地域は「名 - 姓」の順番になる。名前を考える時は注意して欲しい。

ガレイアの特徴は他と混血しても、なかなか現われないことで知られる。ところが、何世代か後に突然 その特徴を持った子供が生まれることもあり、それが大きなトラブルの原因となることもある。予想できない以上、こればかりはどうしようもないといえませんが・・・。

## 国家

- ・ ガーランド選王国
  - ・ ムリッカ家・ソウマ家・アカシエル家・ビュード家・グレムキュリス家・シンカイ家という6つの選王家から王を互選して、統治を進める特殊な国家。各選王家は統核都市と呼ばれる領地を所有し、その都市周辺を治めている。選王に選ばれた王家の統核都市がそのまま王都となる。つまり、選王が代わるたびに王都も代わることになる。
  - ・ 中央が結界に閉ざされる直前まで亜人間種族に対する差別政策を展開していたが、ガーランド戦役後、そうした政策に対して謝罪と補償を行って和解している。なお、この差別政策を執っていた選王家はガーランド戦役で断絶した。
  - ・ 473年にムリッカ家が選王として互選され、500年以降もその統治が続いている。その統核都市リスタが、現在の王都シリアム＝ガーランドということになる。

{{span class,newh, 中央地域には聖帝追悼戦における魔族の最優先攻撃目標である"深淵の森"がある。このため、中央ではエルフたちが中心となって戦い、ガーランド選王国は、その余波を受ける格好となった。中央の戦力が結集しないように、魔族は中央各地でも襲撃を同時進行させており、護国兵団はその迎撃に忙殺された。"深淵の森"での戦いが収束したあとは、エルフの協力で待たちも南方へと転戦した。}}

{{span class,newh, シンカイ家は次期將軍テッシュウをエルフと戦うために派遣した。だが、この戦いでテッシュウは戦死したため、高齡のドウジが跡継ぎが育つのを待っている。エルフたちはテッシュウの献身への謝意をこめて、森の一つに彼の名をつけたという。}}

{{span class,newh, 聖帝追悼戦後、ビュード家が新たな選王に互選されたため、その統核都市モストルクが王都シリアム＝ガーランドとなった。これは戦乱後の情勢を安定化させるための施策だった(前王つまりムリッカ家の当主が王位を返上したためでもあるが)。}}

## 亜人間種族

ガーランド選王国がかつて敷いた差別政策から逃れるため、"ガーランド宮"の周辺に亜人間種族が隠れるようにして住んでいた時期の名残がまだ残っているが、様々な亜人間種族が昔から生活してきた。

## ウィング

ヒューマン世界で生きているウィングも多いが、リアスターグでは自由に飛行できる彼らならではの空中都市も存在している。一応、空を飛べない者でも不自由しないように配慮されているが、そこまで行くのが大変という話もある。中央では"ガーランド宮"の山頂部付近にウィングの住む空中都市がある。

- ・ リッグキート
  - ・ 翼の無い者が辿りつくのは困難な都市だが、もし訪れれば歓迎される。この都市出身のウィングは、リアスターグ各地で見かける機会があるため、南方と縁の無い者はウィングといえば、この都市出身のウィングを想像するだろう。

## エルフ

エルフは氏族と呼ばれる血統の単位があり、それぞれの氏族に最長老がいる。この最長老がいる森を源森と呼ぶが、エルフの森はそれ以外にも数多く存在する。中央では"ガーランド宮"の裾野にエルフの住む地域がある。

- ・ 源森："深淵の森(しんえんのもり)"(ニスティアート氏族)

- ・最長老はグレッサ・ニスティアート。肌の色が、他のエルフ氏族と明らかに異なる彼らは " 深淵の森 " を守るように幾つかの森を形成し、そこから一切出ようとしないし、中に他者が入ることも断固として拒んでいる。何かを守っているといわれるが、その詳細は明らかではない。
- ・中央地域では " 黒のエルフ " と呼ばれており、僅かな例外的事例として、ガーランド選王国の選王に使いが現れたことはあるという。

## ピクシー

ピクシーは小さな体を活かして隠里を作って生活している。その里には必ず女王がいて、親代わりとも言うべき役割を果たしている。中央では珍しくエルフの源森以外のところに里を作っている(エルフと違い周囲に他の里は無い)。これはホビットとの絡みもあるためだろう。

- ・小さき者の園(ホビットと共同)
  - ・ " ガーランド宮 " の切り立った崖の先に " 小さき者の園 " の入り口がある。これはホビットとピクシーが共同で作った里で、かつて亜人間種族への差別政策が強まった時、この場を作ってホビットとピクシーは避難した。ここに入れるのは、まさにホビットとピクシーだけである。現在もピクシーが総力を挙げて作り上げたこの魔法的な防護は働いている。
  - ・現在、差別はされていないため、好奇心旺盛な若いホビットは殆どいない。それでも " 小女王(しょうじょおう) " がここを里としているため、この園自体が無くなることはこれからも無い。

## ホビット

ホビットは通常 数家族程度で寄り集まって丘などに穴を掘って家を作り暮らしている。そして、そうした家が集まっている場所が " 集落 " ということになるが、別々の家単位での交流は無いこともある。中央では事情が特殊で、ピクシーとともに作った隠れ里でかつては生活していた。

- ・小さき者の園(ピクシーと共同)
  - ・ " ガーランド宮 " の切り立った崖の先に " 小さき者の園 " の入り口がある。これはホビットとピクシーが共同で作った里で、かつて亜人間種族への差別政策が強まった時、この場を作ってホビットとピクシーは避難した。ここに入れるのは、まさにホビットとピクシーだけである。現在もピクシーが総力を挙げて作り上げたこの魔法的な防護は働いている。
  - ・差別がなくなって久しい現在、この里にいるのは年老いたホビットが殆どである。外部からは守られることから、その他の地域で暮らしていても、年老いて体の自由が利かなくなったホビットがここに越してくることが多いらしい。明るいピクシーたちの姿も救いとなっているのかもしれない。

## ドワーフ

優れた職人としての技術を持つ種族で、地下に巨大な都市を築き、そこで技を磨く。リアスターグでは各都市ごとに得意とする分野が異なっている。中央では事情が特殊で、なぜか地下都市は作らずにヒューマン社会に溶け込んで生活している。この地域のドワーフは " 土ドワーフ " と呼ばれ、陶芸や塗り物といった器を作る技術に長けている。その技は中央地域で発展した独特の文化とも一体化しており、亜人間種族に対する差別が強まった時も、ドワーフだけは差別を免れた。

- ・捨てられた都アネール
  - ・なぜか住むものがない地下都市。ドワーフの手によるものとしが思えないが、中央地域に住むドワーフが、この都市に住んでいたという事実は無く、彼らは不自然なぐらいそうした都市の存在を否定する。
  - ・「捨てられた」とは言うものの、都市機能自体は現在も生きており、特に侵入者を撃退するトラップの数々は中に入って無事生還する者がいまだに現れないほど嚴重なものとなっている。この都市が何のために作られたのかは謎に包まれたままである。

::{{span class,newh," 血脈の召集 "}}

